

[ 成果情報名 ] 諫早湾干拓初期営農における年内どりレタスの適正窒素施肥量

[ 要約 ] 諫早湾干拓初期営農における年内どりレタスの窒素施肥量は、2.0～3.0kg/aで総収量、品質で大差なく、窒素吸収率は2.0kg/aが最も高く、環境保全の観点からも窒素施用量2.0kg/aが適当である。

[ キーワード ] 諫早湾干拓地、初期営農、レタス、窒素施肥量

[ 担当 ] 総合農林試験場・企画経営部・干拓科

[ 連絡先 ] 電話0957-35-1272、電子メールkurokawa1101@pref.nagasaki.lg.jp

[ 区分 ] 総合・営農(干拓)

[ 分類 ] 指導

-----  
[ 背景・ねらい ]

1998～1999年に小江干拓地で実施された露地野菜の栽培実証においては、肥料切れが早いことが観察され、結果的に多肥栽培となった。また、造成直後の中央干拓地の2000年予備試験でも多肥栽培による増収の傾向が認められた。しかし、諫早湾干拓地においては環境保全型農業を前提としており、初期干拓土壌での年内どりレタスの適正窒素施肥量について検討する。

[ 成果の内容・特徴 ]

- 1．窒素施用量2.0～3.0kg/aで概ね目標400kg/aの総収量が得られる(表1)。
- 2．2001年の2作目以降、総収量、商品化量、品質について区間差は認められない(表1、図1)。
- 3．窒素施用量2.0kg/aで見かけの窒素利用率は高い(表2)。

[ 成果の活用面、留意点 ]

- 1．初期干拓営農指針の施肥水準の参考とする。
- 2．加里(K<sub>2</sub>O)、石灰(CaO)、苦土(MgO)肥料は無施用、牛糞堆肥200kg/a施用条件での栽培である。
- 3．干拓地の初期営農においては、緑肥による有機物のほ場還元や営農排水対策に留意する。
- 4．干拓地においても既耕地の減肥栽培技術の活用について検討できる。

[ 具体的データ ]

表 1 総収量、商品化量及び品質別割合(個数%)

年度	施肥量 (kg/a)	総収量 (kg/a)	商品化量 (kg/a)	品質別割合(%)		
				A	B	外
2001	N2.0	489	429	86	4	10
2001	N2.5	499	428	82	3	15
2001	N3.0	565	477	82	1	19
2002	N2.0	397	397	100	0	0
2002	N3.0	398	398	100	0	0
2003	N2.0	377	308	59	23	18
2003	N2.5	372	324	65	22	13
2003	N3.0	401	305	51	22	26

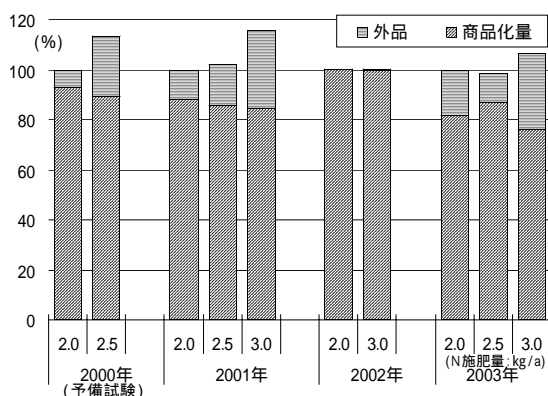


図 1 施肥量と総収量(商品化量、外品)の比  
\*)各年2.0kg/aの総収量を100して対比した

表 2 窒素吸収量と見かけの窒素利用率(2003年)

区名	吸収量計 (kg/a)	見かけの窒素 <sup>*)</sup> 利用率(%)
N0(堆肥有)	0.10	-
N2.0	0.76	34
N2.5	0.79	29
N3.0	0.85	26

\*)見かけの窒素利用率 =  $\frac{(\text{各区窒素吸収量} - \text{無窒素肥料区吸収量})}{\text{各区窒素施肥量}} \times 100$

耕種概要及び区の構成(参考)

年	品種	播種日 (月/日)	定植日 (月/日)	収穫日 (月/日)	栽植数 (株/a)	畝間 (cm)	株間 (cm)	条数	区の構成		
									N2.0 (kg/a)	N2.5 (kg/a)	N3.0 (kg/a)
2000	極早生シスコ	8/31	10/2	12/6	769	130	30	3			
2001	ステディ	9/6	9/26	11/16~12/26	710	160	35	4			
2002	マイヤー	9/6	9/25	11/20~12/4	705	160	35	4			
2003	ステディ	9/10	9/30	11/21~12/1	705	160	35	4			

\* 1)作付け履歴; 00年(ソルゴー) 01年(クリムソクローバー セスパニア レタス) 02年(麦 ソルゴー レタス) 03年(エンバク ソルゴー レタス)

\* 2)00年春期に本暗渠、石膏投入、耕起整地及び営農排水を行い、その後も緑肥の栽培前に弾丸暗渠、パワーディスク等の営農排水対策を原則的に行っている。

[ その他 ]

研究課題名: 2)諫早湾干拓営農対策試験(2)営農対策試験 作物施肥試験

予算区分: 県単

研究期間: 2000~2003年度

研究担当者: 黒川陽治

発表論文等: